

研究ノート

作文の訂正作業に対する学習者の意識について

小寺里香

はじめに

作文や論文作成の授業においては、学習者の書いた文章に対する教師のフィードバックは欠かせないものとなっている。教師からのフィードバックを基に学習者は自分の文章を再考し、文章作成能力の向上を目指していく。

作文の添削方法や基準に関しては、担当教師の判断や能力に任されていることが多く、コース内に統一基準を作っているという機関は少ない。訂正方法としては、作文に直接書き込みを行う他、文章中の誤用から主なものを取り上げ、授業中に全体解説をする、学習者間で話し合う機会を持たせ再考する等、様々な方法があるが、果たしてこのような活動に対し、学習者はどのような意識を持っているのであろうか。学習者側から見た望ましいフィードバックとはどのようなものであろうか。

本調査では、教師からのフィードバックのあり方を探る第一段階として、筆者の担当する中級クラスの日本語学習者にアンケートを行い、学習者側から見た訂正作業に対する意識を探った。

本稿ではこれまでの作文の訂正、添削等の方法に関する研究論文の簡単なまとめに加えて、日本語学習者に対して行った作文訂正方法に関するアンケート調査の結果について報告したい。

1. 作文の訂正作業に関して

作文の訂正作業については、従来、教師からの一方的な訂正を学習者に与えるという形が多かったと思われるが、近年、学習者のモニター能力を生かした

自己訂正法（小宮 1991、石橋 2000）や学習者間のピア・レスポンス（学習者同士が作文フィードバックを行う活動）を利用した指導法なども取り入れられるようになってきている。これらの自己訂正やピア・レスポンスの有効性（池田 1999、影山 2001 等）に関する研究も盛んに行われている。

石橋（2000）では、学習者が自分の書いた作文をどのように自己訂正できるかを検証し、その結果、モニタリングによる自己訂正には正確性があるが、訂正箇所に関しては、文意に影響を及ぼさない表層レベルのものが大半で、文・段落などのテキストレベルにまでは行われていないことを明らかにした。この推敲能力は学習者の日本語能力に比例しており、能力が高くなるほど自己訂正能力が上昇することも明らかになっている。

また、小宮（1991）では初級後半の学習者を対象にした推敲能力の調査を行っている。その調査では、推敲を通して初級後半の学習者が自分で発見できた誤りは 30% 以下であり、70% 以上が教師の指摘を受けての訂正となっていた。これらの結果から、日本語能力の低い学生の場合には、モニター能力ばかりに頼らず、教師側からの指摘や推敲のための基準（訂正のヒント）を与えることも必要であることがうかがえる。

ピア・レスポンスに関する研究も、近年、様々な研究者によって行われているが、池田（1999）においては、中級レベル以上の学習者であれば、教師フィードバックと同等、もしくはそれ以上の教室活動の効果があることが明らかになっている。また、より日本語力の高い学習者に対し効果が出ることも証明されている。学習者の母語が統一されている場合には、母語でのピア・レスポンスであっても、作文の内容や推敲作文に良い影響を与えるという調査報告も存在する（広瀬 2000）。

このような近年の研究から、学習者はレベルが上があればある程度の自己訂正は可能なため、中級以上であれば作文を書かせた後にすぐ提出させるのではなく、モニターをさせる機会を十分に与えることが必要であると言える。授業中には、書く時間に加えて推敲作業を意識的に入れることにより、教師が他の部

分の訂正に時間を費やせることも指摘されている（小宮 1991）。しかし、モニターできる範囲は表層的なものに限られている場合が多いため、やはり、全体の構成などの訂正は、教師側の役割が大きくなっていくようである。

作文の訂正というと、つい細かい誤用（表記や文法）に目が行ってしまう傾向があるかと思われるが、全体の構成や文章のつながり等に目を向けた訂正作業にも時間を費やせるよう、学習者が可能な訂正作業と、教師側から働きかける必要のある項目とを教師側が意識することにより、更に効率のよい指導が可能になっていくと思われる。

2. 訂正方法に関するアンケートの概要

では、教師からのフィードバックについて日本語学習者はどのように考えているのだろうか。本稿ではそれを探るべく、簡単なアンケート調査を行った。

調査の対象は日本の大学で学ぶ学部留学生 26 名である。複数の教育機関やクラスで調査を行ったため、レベルは統一されていないが、中級クラスに在籍する学生を対象とした。実施時期は 2007 年 10 月～11 月である。

出身国（地域）は、中国（15 人）、香港（5 人）、韓国（3 人）、台湾（2 人）、モンゴル（1 人）となっている。

こちらの用意した質問（資料を参照）に記述式で自由に回答してもらった。なお、今回は、筆者が現在担当している特定の授業についてではなく、学習者が「今まで受けた作文の授業」について尋ねた結果となっている。

3. アンケート結果

本稿ではそのアンケートの結果から主な回答を抜粋して紹介する。

3.1 訂正方法に関して

設問 1、作文を直すときに、特に見て直してほしいポイントについての回答

は以下ようになった（以下、全て複数回答）。

表1 設問1直してもらおうとき特にどこを見て直してほしいですか。

	1) 直してもらおうとき、特にどこを見て直してほしいですか。	(人)
1	文法	21
2	言葉の使い方	18
3	全体の構成	7
4	漢字	3
5	同じ意味の単語	2
6	間違いを全部直してほしい	1

回答では「文法」や「言葉の使い方」など表層的なものが多くなっているが、次いで見られたのは先行研究で教師が積極的に正すべき項目として挙げられていた「全体の構成」となっていた。

回答の中には「全体の構成については、言語が違ってても大体方法は同じであるため、特に触れなくても良い」という記述も見られたが、やはり直してほしいと考える学習者が多いようである。

次に 教師からの訂正方法については以下のような回答が得られた。

表2 設問2 どうやって直してほしいですか。具体的に書いてください。

	2) どうやって直してほしいですか。	(人)
1	正しい使い方や文法に加えて、同じ意味の表現の例を挙げてほしい	8
2	間違えたところに正しい答えを書いてほしい	7
3	詳細が分かるまで説明してほしい	2

最も多かったのは、「正しい答えを書き、同じ意味の表現を挙げ、説明してほしい」というものであった。ただ直して、正答を書くだけでなく、数個の例や類似表現を挙げることも教師に要求されている。

筆者の場合は、従来、学習者が間違えた部分にアンダーラインのみを引いて間違いであることを示し、その後考える時間を与え、別紙に答えを考えても

らうという方法を取ってきた。しかし、今回の結果を受けて、訂正方法を変えて授業を進めることを試みている。

実際、筆者が教えている学習者（中級レベル）にとっては、自分でモニタリングをするよりこちらのほうが好ましいようで、正用を明示的にした場合のほうが、誤用に関する質問なども多く出るようになり、授業も以前より活発になってきている。

そして、1名であるが、「正しい書き方であっても、もっと適切な表現がある場合は積極的に直してほしい」という意見も見られた。教師は、学習者の書いた作文の元の形を出来るだけ残して添削することを考える傾向があるため、正用の部分はい見落としがちになってしまうが、正しいものを更に良くするという意識を忘れず、添削していく必要もあるだろう。

設問1, 2に関連して、設問5「今までに効果的だった直し方」についても、「間違ったところに正しい答えと例を直接書いて説明する」が11名と最も多く、設問2とほぼ同じような結果となった。その他、「小さい文法の問題点でも直す」(1名)、「全体の流れなどについて指摘してある」(1名)等の回答が見られた。

設問6の「効果的でなかった直し方」については、無記入や「特になし」といった回答が多かったが、中には「小さい文法の問題に注意しない」、「肯定的なコメントだけをする」、「間違いについての説明が短い」といった意見も見られた。苦勞して作文を書いた以上、肯定的なコメントのみでは満足せず、少しでも改善されることを望んでおり、これらの回答からは日本語能力を積極的に高めたいという意識が垣間見える。

3.2 訂正の量について

また作文の訂正量について尋ねた設問3については、多くの箇所を直された場合に、「もっと頑張らなければならないと思う」が10名、「とても勉強になると思う」が3名、「うれしい」が2名と肯定的な意見が非常に多かった。「恥ずかしい」

という否定的な意見を書いたのは1名のみだった。

自分の書いた作文が訂正で真っ赤になった場合の学習者の落胆度合い考えると、教師は訂正に対し遠慮がちになってしまう場合もあるかと思われるが、あくまで学習の場であると割り切り、積極的に訂正していくことも必要であると思われる。

しかし、その反面、これが全体での作業となると話は別のようなのである。設問4「自分の文章がみんなの前で訂正される時どう思うか」については、「大丈夫だ」等の肯定的な意見が9名、「恥ずかしい・嫌だ」といった否定的なものが10名、「特に何も感じない」と書いた者が3名となっていた。

学習者によっては自分の作文が例として取り上げられることに対し、否定的な思いを抱いている可能性もあることを教師側は知っておく必要があるだろう。学習者個人の性格にもよるかもしれないが、今後は、作文の授業の開始時に意向を聞いておく必要もあると考えている。

3.3 リライト作業について

作文教育において、訂正された作文全体をリライトする作業は効果的であると言われている。リライト自体も作文の授業に組み込んで行われている場合も多いと思われるが、この作業に対して学習者はどのような意識を持っているのであろうか。

今回、短い作文(1000字以内)のリライト作業に関して尋ねてみたところ、「必要だ」と答えた者が13名、「必要でない」が13名となり、学習者間で大きく意見が分かれた。

「必要でない」と答えた人の理由を見ると、「先生からの訂正を見るだけでよい」(3名)、「問題点さえ分かれば書く必要は無い」(3名)、「時間がない」(2名)、「自分の言いたいことが伝わればそれでよい」(1名)、「面倒だ」(1名)、等となっていた。

また、必要な場合の理由としては、「何回も書くとよく覚えることができる」、「もっと作文が良くなる」、「しっかり理解できる」など学習に対して意欲的なものが多かった。

3.4 「書き」の授業に対する学生からのリクエスト

最後に、設問9で「作文などの「書く」授業でしてほしいこと、してほしくないこと」を書いてもらったところ、以下のような意見が挙がっていた。

- ・短い文章をたくさん書かせて、それを直す作業をしてほしい。
- ・たくさん書くことが重要なので、授業中にたくさん書かせてほしい。
- ・授業中に書く練習をしてほしい。
- ・日本語と母国語の文章作成方法の違いをおしえてほしい。
- ・作文全体の構成を教えてほしい。
- ・面白いことを皆に伝えたり、間違ったところを直しながら皆と研究したい。
- ・ただ、モデル文になぞって書くのではなく、先生や皆で話し合いながら書くほうが良い。単純な練習はしてほしくない。

教師としては、授業中に時間を使って作文を書かせることに対し抵抗がある場合もあるが、「書き」のクラスの場合には、課題として渡すより、授業時間内での作業のほうを学習者は望んでいるようである。

また、学習者と教師が十分にコミュニケーションを行った上での作成を望む声も見られている。

4. まとめ

今回、自分の担当するクラスの学習者にアンケートを取ってみて、改めて作文クラスの授業のあり方を検討することができた。

中級レベルであっても、明示的な誤用訂正を望んでいること（間違えた箇所のできるだけ近くに正しい答えを示すこと）、また、正しい使い方のみを示すのではなく、同じ意味の表現や例を複数用意して与えること、たとえ正しい表現であっても肯定的な評価だけで終わらせず、できるだけ他の良い表現を与えるよう心がけること等が求められているということが分かった。

また学習者によっては、書いたものを紙面上で徹底的に訂正されることにより、逆に学習意欲が高まる場合もあるようである。しかし、教室全体で誤用を取り上げて訂正・解説する場合には、たとえ名前を伏せても、それを好ましいと思わない学習者もいるということを念頭に置いておかなければならない。可能ならばコース開始前に学習者の意向を確認しておくとも良いだろう。

授業に対するリクエストからは、作文の構成を与える段階で終わらせるのではなく、あくまで授業内で書かせていくことを目的とし、加えて一度書いたものをモニタリングさせる時間も含めて授業を構築する必要があることが分かった。

また、中級クラスに適した推敲項目に関してコース前に考え、学習者自身でできる訂正項目を明確化する必要がある。それにより、訂正作業の効率化をはかることができるであろう。

今後は以上のような結果を踏まえて、作文クラスを担当し、より学習者にとって満足のできる訂正作業が行えるよう努力していきたい。

参考文献

- 1) 池田玲子 (1999) 「日本語作文推敲におけるピア・レスポンスの効果 中級学習者の場合」『言語文化と日本語教育』17 36-47 お茶の水女子大学日本語言語文化学会
- 2) 池田玲子 (2000) 「推敲活動の違いによる推敲作業の実際」『お茶の水女子大学人文科学紀要』53 201-213 お茶の水女子大学
- 3) 石橋玲子 (2000) 「日本語学習者の作文におけるモニター能力—算出作文

- の自己訂正から一」『日本語教育』106号 56-65 日本語教育学会
- 4) 石橋玲子 (2002) 「日本語学習者の産出作文に対する教師の修正及び修正行動」『言語文化と日本語教育』23 1-12 お茶の水女子大学日本語言語文化学会
 - 5) 影山陽子 (2001) 「上級学習者による推敲活動の実態—ピア・レスポンスと教師フィードバック—」『お茶の水女子大学人文科学紀要』54 107-119 お茶の水女子大学
 - 6) 小宮千鶴子 (1991) 「推敲による作文指導の可能性—学習者の能力を生かした訂正」『日本語教育』75号 124-134 日本語教育学会
 - 7) 広瀬和佳子 (2000) 「母語によるピア・レスポンス (peer response) が推敲作文に及ぼす影響—韓国人中級学習者を対象とした3ヶ月の授業活動をとおして—」『言語文化と日本語教育』19 24-37 お茶の水女子大学日本語言語文化学会

【資料】 <作文の訂正方法に関するアンケート>

性別 () 出身国 (地域) () 母国語 ()
日本語学習暦 年 学年 年

これは、みなさんが書いた日本語の作文(論文・レポート)についての訂正作業(間違いを直す)を、改善するために行うアンケートです。

次の質問に率直に答えてください。

1. 日本語の先生に作文やレポートを直してもらったとき、特に、どこを見て直してほしいですか。

例：ことばの使い方・文法・漢字・作文全体の構成…など

2. どうやって直してほしいですか。具体的に書いてください。

3. 書いた作文がたくさん直されていたとき、どう感じますか。

4. 自分の作文や文章が、みんなの前で訂正されたり、直されたりするときどう思いますか。

5. 今まで、直してもらったやり方で、良かった(日本語能力の向上に効果があつた)と思う直し方を教えてください。

6. 今まで直してもらったやり方で、良くなかった(効果があまりなかった)と思う直し方を教えてください。

7. 自分が書いた短い作文(1000字以内)を、もう一度全部書き直す作業(リライツ)は、必要だと思いますか。○をつけてください。

必要だ・必要ではない

8. ↑の理由は何ですか。書いてください。

9. 作文などの「書く」授業で、してほしいこと、してほしくないことを自由に書いてください。